

作業分析に基づきペットケア負担を可視化する評価指標の開発



【池袋キャンパス】健康メディカル学部 作業療法学科 教授

菊池 和美 Kikuchi Kazumi

URL: [帝京平成大学 教員業績紹介ページ](#)



キーワード: 高齢者・犬・猫・ペットケア・IADL・作業療法・愛玩動物看護師・介護予防・地域包括ケア・ワンヘルス・飼育負担

研究の概要

SDGs 目標 3: すべての人に健康と福祉を

SDGs 目標 11: 住み続けられるまちづくりを

飼い主にとって犬や猫は、単なるペットではなく家族の一員です。特に、高齢者にとっては、生活リズムや運動機能の維持、精神的安定を支える大切な存在です。しかし、加齢に伴う体力や認知機能の低下、住環境の制約などにより、日常的な飼育作業が負担となり、飼育を続けることが難しくなる場面もあります。

本研究では、飼い主の生活関連活動（IADL）の一つとして、このペットケアの作業内容を収集し、作業分析を通して、ペットとともに安全に暮らし続けるために必要な作業遂行能力を明らかにします。これらの作業を通して、高齢者のみならず多世代に応用可能な、ペットケア遂行力の評価指標の開発を目指しています。

“犬”に関しては既に、レビューを経て（ICP2024）、犬の飼い主らより 302 の飼育作業を網羅的に収集し、作業の煩雑さや継続不安を（ヒトと動物の関係学会 2025）、また、我が国ならではの多様な作業負担の存在を示しました（IAHAI02025）。これらの知見から、飼育が困難になる以前より、人とペット双方への予防的な介入が必要であることを指摘しました。現在は、“猫”についても同様の検討を並行して進めています。

人を対象とした高齢者支援では、作業療法をはじめとした介護・看護・リハビリテーションが「予防的支援」や「生活環境整備」等が充実しつつあります。ペットに関しては、動物の健康と暮らしを支える愛玩動物看護師の役割は極めて重要ですが、現状では医療的なケアが中心で、ペットと飼育者の生活像の把握や支援は十分とは言えません。高齢者とペット、双方の生活を支えるという本研究の視点は、学際的かつ国際的に注目されるワンヘルス（One Health）の理念にも合致します。

今後は犬と猫の研究成果を統合し、ペットケアを生活に関連する活動（IADL）のひとつとして評価し、ヘルスプロモーションとの関連性を検討していきます。将来的には、飼育継続の難しさを早期に捉える枠組み（PetCare-IADL）の構築を目指し、多職種が協働する支援モデルとして、飼育者・高齢者の支援・地域包括ケア・ワンヘルスの実践に貢献できる可能性があります。

実学へのつながり・産業界や自治体へのアピールポイント・協力可能事項・協力希望事項

本研究の成果は、作業療法教育における実践的な学びに直結し、生活行為分析や環境調整を学ぶ教材として活用できます。また、愛玩動物看護師との協働など、多職種連携教育（IPE）にも広がりをもたせ、高齢者支援の新しいモデルを理解する機会となります。本研究が明らかにする「ペットケアに必要な作業遂行能力」は、産業界における新たなサービス開発や製品設計、ペット保険のリスク評価、見守り ICT の開発などにも応用可能な基盤情報となります。自治体にとっても、フレイル予防・孤立防止・在宅支援といった施策に直結し、地域包括ケアの枠組みに新たな視点を提供できる点が大きな強みです。また、ワンヘルスの理念にも合致し、住民の健康と動物福祉の双方に資する研究として実践的価値があります。

今後は、産官学および専門職との協働を進め、ペットケア負担の軽減につながるサービスや支援策の開発、実証フィールドの構築、大規模調査の実施を目指します。犬猫の飼育作業に関するデータ提供、負担分析、環境評価に基づく助言、多職種と連携した支援モデルの検討など、共同研究として展開できる幅は広く、教育・研修・啓発活動にも貢献できます。また、自治体や企業との継続的な連携を通じて、PetCare-IADL の社会実装を進め、高齢者とペットが安心して暮らせる地域づくりを、ともに推進していきたいと考えています。